

あとがき

「これが日本の伝統」に乗っかるのは、楽チンだ

もちろん、この本にあげたもの以外に、かなり古くから続いている「日本の伝統」もたくさんあります。それらは、わざわざ取り上げていないだけです。

この本は「伝統」そのものを否定しているわけではありません。さらに言えば、長く続いているから素晴らしく、短いから価値がないというつもりもありません。ただ、

「たかだか百〇百五十年程度で、『日本の伝統』を誇らしげに（ときに権威的に）名乗る」というケースに違和感がある、というだけです。

もっとも「百年」を長いと見るか短いと見るかは、人それぞれでしょう。人間は、せいぜい生きても百歳。ということは、自分の人生以上の歴史と、その時代を生きてきた祖先たちに思いを馳せることができるか——ということ。いわば、人それぞれの「歴史への射程距離」によって、違ってくるのでしょうか。

どんなに歴史ある伝統でも、いつの時代かに、どこかで、誰かが創ったものです。比較的新しい伝統ではそれが見えやすい、というだけのこと。

すべての「伝統」は、始まった時には伝統ではありません。なんらかの必要性や意義が

あって続けてきたので、のちに「伝統」になった。だが、年月を^へ経るうちにその意義や必要性が変化し、あるいは消滅し、それとも忘れられ、いつの間にかたゞ「続けることそのもの」が存在理由になっている「伝統」もあります。

続けるため、時々の風潮に合わせ、けっこう柔軟に（あるいは無^む節^{せつ}操^{そう}に）変化している伝統もあります。しかし人は、自分がいま見ている「伝統」が開始当時から不変のまま続いてきた——と思います。

また、「伝統」という看板を掲げてはいるけれど、その実態は「権^{けん}益^{えき}、権^{けん}威^いの維持と保護」にすぎないケースもあります——ミもフタもない言い方ではありますが。

「伝統があって、人間がある」のではなく、「人間があって、伝統がある」。人は伝統の下僕ではありません。ですから、「伝統だから大切にしよう」はいいのですが、「伝統だから従わなければならない」というのは、おかしい話。しかもその伝統が、実はごく近い過去に創られていたとしたら……。

しょせんは過去の自分たちが創った「伝統」に縛^{しば}られて、のちの世の人間が身動きできなくなってしまうとしたら、こんなに滑稽^{こっけい}なことはありません。

長く続けてきた「伝統」に何か不都合が生じた場合、「なぜこうしているのか？」とその理由を考えます。考えて、原因がわかれば改善すればいいし、止めたっていいのです。ところが、「なぜこうしているのか？」への答えが「伝統だから」では、なんだか同じ所

をぐるぐる回っているようで、改善の糸口がありません。「伝統」という言葉には、どうやらそういう魔力がある。しかも「伝統を維持する側」だけでなく、「伝統に従う側」もまた、ついその魔力にすがってしまふ。

一般に、人は自分の頭で考えることをやめると、世間とかかわる時、まるで素っ裸^{すばだか}で往来に出るようで心細い。そんな時、「権威」「ブランド」「伝統」に頼ります。そういったものにすがれば、いちおう安心できますから。

だから「これが日本の伝統です」と声高^{こわだか}に宣言しているものに乗っかるのは、楽チンなのです。けれど、少しだけ「本当にそうなのか？」と、自分の頭で考えてみるだけで、見えてくる風景はずいぶん変わってきます。

疑問を持ち、自分の頭で考えてみる。それは少しだけメンドクサイけど、少し楽しい。

なお、源流は古くても、多くの人々が受け入れてから「日本の伝統」となるわけで、その時期はハッキリしません。この本では、信頼できる説を元に「約××年」と判断しました。もし大きく違っている事実があれば、ご教示ください。

藤井青銅